

中学校選択英語における実践と評価方法

松尾 砂織 村上 直子 深澤 清治 松浦 伸和

1. はじめに

本学園では、平成15年度より「幼小中一貫の教育力を活かした社会のグローバル化・高度経済化・超少子化の進展に対応する国際的コミュニケーション能力の育成を中心とした21世紀型学校カリキュラム」の研究開発を行っている。この中で、21世紀型教科学力については、「協同的創造力」ととらえ、21世紀に新たな文化を生み出していくような協同的に働く教科の力であると提言しており、平成18年度より、この力を選択教科の中で育むことをねらいとしている。本研究は、少人数指導による選択英語の学習方法と評価方法の開発を行うためのものである。

2. 研究の目的と評価

必修の英語科には、外国語を通じて言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養うという目標がある。選択英語においては、必修の目標を踏まえつつ、生徒の特性に応じて多様な学習が展開できる課題学習とコミュニケーション能力を高める補充的な学習を扱う。課題学習は、同じ目的意識を持った生徒同士で小グループを編成するため、学習の過程で多様な考え方や価値観に触れる機会が増える。コミュニケーション能力を高める学習についても、小グループを形成し、互いの学習状況を確認し、改善しあいながら進める学習を計画、実施する。評価方法として、複数の異なった意見を持つ小グループが、自分のプロジェクトや自分の活動に対して行なう自己評価と、他のプロジェクトや他の活動を相互評価する2つの観点を重視して行なった。

3. 選択英語の授業実践

授業実践は、中学校第3学年と第2学年で実施し、選択英語受講者である第3学年22名(男子4名、女子18名)、第2学年21名(男子6名、女子15名)を対象とし、

小グループを編成して実施する学習と、コミュニケーション能力を高める学習を実施した。

(1) 中学校第3学年の事例①

○単元名「リーディングプロジェクト～園児に対する英語絵本の読み聞かせ～」

○単元目標

- ・物語の場面を意識した音読の力を高める。
- ・幼稚園園児さんが楽しめるような音読の工夫をグループで行う。
- ・物語の内容が伝わるような音読の仕方を考える。

○単元計画(全6時間)

第1次 音読教材の選択とグループ編成

第2次 音読教材に対する理解と意見交流および評価基準の設定

第3次 効果音の選択とグループ内での音読練習

第4次 グループごとの音読発表と相互評価

第5次 英語絵本の読み聞かせ実践と設定した評価基準に対するプロジェクトの評価

第6次 課題の明確化と改善および次回の発表計画

○実践の背景

英語を読むことに対して意欲的で、積極的に読もうとする姿勢を見せる一方で、聞き手のことを考えて読むことに対する意識が低いということが生徒との口答試問で分かった。そこで、読み手が聞き手のことを配慮し、工夫しなければ聞き手が理解することが困難である状況を意図的に作ることにした。その際に、幼小中が同一敷地内に位置するという本学園の利点を生かして、聞き手を園児に設定し、英語絵本の読み聞かせを計画した。本校では2年前から必修の家庭科(2学年次)でオリジナル絵本を作成し、園児に読み聞かせる活動が位置づいており、園児の扱いに関しては、不安はないが、園児に分かる英語表現をオリジナルで創り出すことは極めて困難である。そこで今回は、既存の英語絵本を使用し、その絵本の内容理解を促すために

音響を用いた。今回の実践は、既存の英語絵本を読み聞かせることを重点としたが、学習が進めば、自分たちのオリジナル英語絵本の作成まで踏み込んで考えていくこともできる。

○授業の実際

第1次では、リーディングプロジェクトの学習目標および評価に関する理解を促すために、プロジェクト型学習の趣旨説明を行なうとともに英語絵本への作品理解を深める時間を設けた。これは、園児に対する読み聞かせとして使用する英語絵本の教材5つをすべて提示し、全訳を配布し絵本への理解を徹底した。その後、興味関心が高い作品を1つずつ個人で選択させ、同じ考えを持った生徒同士でグループを編成した。今回は教材が5つだったため、5つのグループを編成した。

第2次では、グループ内の音読練習を中心に行なった。発音が分からない単語を調べて音読の準備をし、グループで向き合って座り、互いの表情を見ながら音読をした。音読後は、グループ内で「工夫点」「聞いてよかった点」「改善が必要な点」を論議し、相互評価を行なった。

第3次では、園児が英語の音を楽しめる工夫の一つとして、音響効果について考えた。効果音の使用によって、園児が興味を持って英語絵本を見てくれるだろうという仮説の下に、「ドラマチック」で「物語とマッチしている」効果音の選択となるように、グループで相談し、決定させた。

第4次では、リハーサルを実施し、各グループが発表をした。聞く側は、自分が園児であるという立場を意識し、それを配慮した工夫があったかを踏まえて相互評価を行なうと同時に、自己評価をさせた。発表後は、各グループからの評価を元に、課題解決のために論議し、修正を加えさせた。

第5次は、園児に対して英語絵本の読み聞かせを実施した。お迎えの時間に合わせての実施だったために、保護者と共に落ち着いた様子で絵本の読み聞かせに参加する園児が目立った。終了後にプロジェクト全体に対する自己評価と相互評価を行なった。自己評価の中で次への思いを述べた生徒もいた。

「(中略)読み聞かせはあっという間に終わった。息きよ日本語でも読み聞かせをしたりした。園児さんに分かりやすい日本語訳を考えておけばよかった。また次回挑戦したい。」

○評価について

評価は、学習目標に準拠した評価基準をループリックで提示した。学習によってつけたい力を明らかにし、

プロジェクトの達成度を評価できるようにした。また、自己評価と相互評価を組み合わせて実施することによって、評価をつける際に多様な考え方や価値観に触れる機会を設けるように工夫した。



《お互いのプロジェクトを評価してみよう》

★音読を聞いて分りやすかったグループの工夫は何だと思えますか、すべて書いてみましょう。

★幼稚園園児さんに読み聞かせる際に、英語が分からないので聞いてもらえなかったりした時には、どうしたらいいと思いますか。

《他の人が出した意見》グループ内で意見交流し、出た意見をまとめておこう。

相互評価シート（他グループを評価・点検する）

《今日の学習目標》

	A	B	B-	C
物語の内容が伝わるような音読の仕方を考え、グループで協力している(協同的創造力)	グループで役割を分担し、自分の役割を果たしながら物語の内容が伝わるように工夫している(協同的創造力)	グループで役割を分担し、物語の内容が伝わるように工夫して音読している。	グループで役割を分担し、音読をしようとしているが、物語の内容が伝わるような工夫が見られない。	グループで役割を果たすことができず、物語の内容が伝わるような音読の工夫もない。

本時の自己評価（ループリックを利用した評価）

(2) 中学校第3学年の事例②

○単元名「スピーキングプロジェクト～スピーチコンテスト出場に向けて～」

○単元目標

- ・テーマに沿った英文を書くことができる。
- ・2分30秒以内で、自分の考えをまとめる。
- ・一番言いたい内容が相手に伝わるような話し方を工夫する。

○単元計画 (全14時間)

- 第1次 スピーチプロジェクトの概要
- 第2次 日本語原稿作成
- 第3次 音読発表と相互評価
- 第4次 スピーチ練習とパワーポイントによる要旨作成
- 第5次 スピーチ実践
- 第6次 プロジェクト全体のまとめ

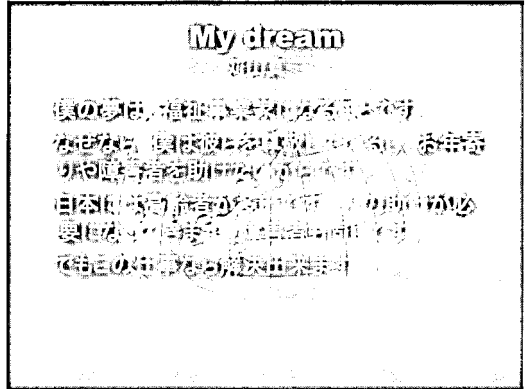
○授業の実際

第1次では、スピーチプロジェクト実施に向けて、目標を確認した。毎年実施される三原市主催の中学生英語スピーチコンテストへの出場と、本校主催の選択学習発表会への出場を兼ねたプロジェクトであったため、テーマは My Dream, My Family, My Friends, My School の4つに限定された。

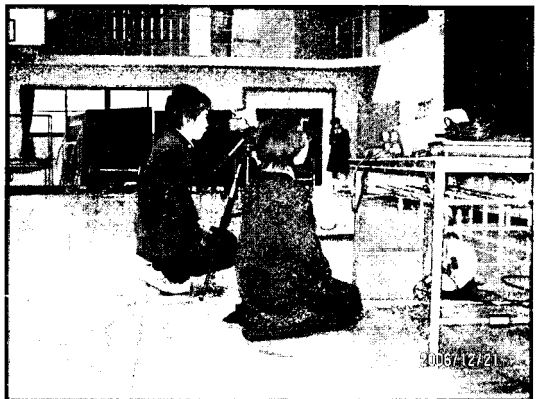
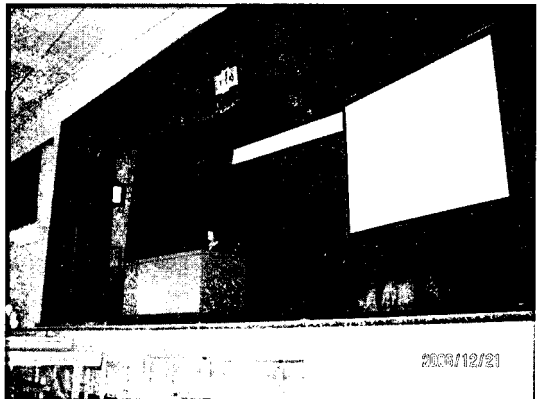
第2次では、スピーチコンテストに必要なテーマ説明として、日本語100字以内でスピーチの骨子をまとめた。

第3次では、テーマに沿って作成したスピーチ原稿を音読した。本時の評価基準を明確化し、達成度を確認するために相互評価を行い、原稿を修正した。

第4次では、ステージを使った発表練習とともに、自分の意見を主張する際に必要なジェスチャーについても考えた。また、三原市主催の英語スピーチコンテスト(2006.11.4)に参加した2名は、パワーポイントを使って、他の発表者が作成した骨子をもとに、概要説明を作成した。三原市主催のスピーチコンテストの様子を映像で見て、スピーチに必要な態度や工夫を学習した。



第5次では、スピーチ実践を行なった。舞台でのスピーチ発表は完全暗唱とジェスチャーやアイコンタクトが評価の対象となっていた。作成したパワーポイントはスクリーンに映し、発表態度をビデオで記録した。



選択英語 Speech contest にむけて2

選択英語9年授業プリント October 20th, 2006

9-() No () 採点者名 ()

【第2回評価会】評価はすべてABCの自己評価でつけます。

- 1) 発表の事前にも何度も音読練習し、つまらずに流暢に音読ができる。
- 2) 棒読みや日本語英語は不可。イントネーションをつけて英語を発音できる。
- 3) ちら見程度で音読ができる。
(※もしも覚えていた場合は、原稿を見ずに言うのが望ましい。)
- 4) 聞いていて、言いたい内容が分かる英文を多く使っている。

★特記事項★ 原稿がなく、即興で発表をした場合はここにFを入れる。

発表者	1	2	3	4	特記事項

第6次では、プロジェクト全体のまとめを行なった。作成した原稿を見てまとめる記述評価と、スピーチ発表の態度を振り返って評価する選択式評価に分けて学習のまとめとした。

【作成したスピーチ原稿を見て分かること】 記述による評価（作成した原稿より抜粋）	
テーマ	
テーマ設定の理由	
一番主張したかったこと	
『一番主張したかったこと』を伝えるために、どんな英語表現を使って書いたかを原稿から抜き出して、右に書き抜きましよう。	

記述評価に対して、生徒は次のようにまとめており、作成したスピーチ原稿と照らし合わせてことで、学習を振りかえることができる。（22名中21名が回答）

生徒A

強くなるように努力できるようになりたいこと
It means that keeping rules and time and doing things I have to do before things I want to do.
I think that is the most necessary for me.

生徒B

みんなに夢に向かって頑張って欲しいということ
I think I can do anything now. I will try to contact with people gently and I always smile for that reason. The person who has a dream is to work for grant of the dream. The person who doesn't have a dream now should find the dream which is fitted.

生徒C

夢に対する情熱
I think to make a happy family is my final dream, so I will keep this feeling about my love of soccer. I will strive to achieve my dream.

生徒D

国際交流のよさと、英語を話すことについて
Then we learned a lot of things about world peace. The activities were brought confidence of speaking English.

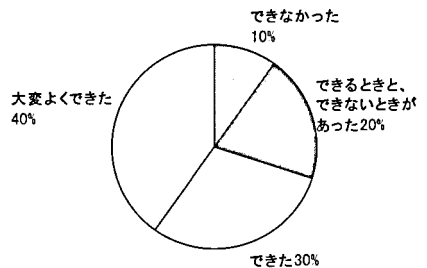
【ステージや教室での発表練習に対する取り組み態度から分かること】選択式（4段階評価）

4（大変よくできた）3（できた）

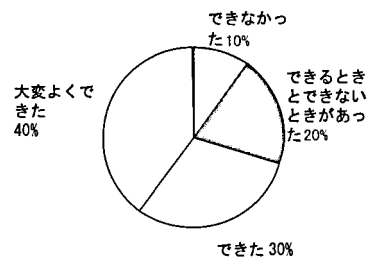
2（できるときとできないときがあった）1（できなかった）

①発表の事前に何度も何度も音読練習したので、発表する際にはつまらずに、流暢に音読ができた。	
②棒読みや日本語英語は不可なので、イントネーションをつけて英語らしく発音できるようにした。	
③ちら見程度で音読ができるように、原稿を覚えた。	
④聞いている相手（ここでは中3を対象）が、自分のスピーチ内容を理解できるようにジェスチャーやアイコンタクトを要所で使った。	

ジェスチャーやアイコンタクトを使った



イントネーションをつけて英語らしい発音ができるようにした



【英語スピーチの取り組みを終えて】

記述 または 選択

- | | |
|---|--|
| ①取り組みの前と後では自分に変化があったかどうか。
→1つ選んで○で囲む | ある ない
どちらもいえない |
| ②①の回答に対して、どうしてそう思うかを分かるように理由を書いてください。 | |
| ③次にまたスピーチに取り組む際には、どんな点について取り組めば今回よりももっと充実した内容になると思いますか。 | |
| ④スピーチに取り組む際に使う評価として、適切だと思う内容を書いてみよう。
※例えば、この度の評価は「原稿の内容」「発表態度」の2つから評価をしますが、それ以外でもあった方がいい、やめたほうがいいという評価内容を書いて下さい。 | |

取り組みの前後で自分に変化があったかどうかを聞いた設問に対しては、81%の生徒に変化があったと感じており、あったと答えた生徒の理由を次に挙げる。

- ・最初は英文なんて書けるわけがないと思っていたけど、やっているうちに楽しんでできるようになりました。
- ・取り組んだ後、自分で英文を考えることができるようになった。
- ・ただ伝わるだけじゃなくて、気持ちを含めてスピーチしようと思うようになった。
- ・聞きやすいような文の構成にしたらいいと思うようになった。

一方、変化がなかったと答えた理由は次の通りである。

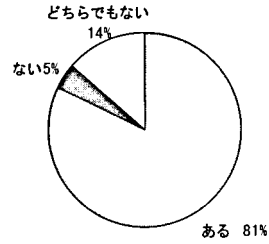
- ・特に思いあたらないから。

どちらもないと答えた理由は、次の通りである。

- ・自分では変化が分からないから。
- ・本番で結局ジェスチャーができなくて、しかもつま

たりしてしまったから。

取り組みの前後で考えに変化があったか



○考察

スピーチプロジェクトに取り組むにあたっては、原稿の内容とスピーチスキルの2観点を中心とした評価基準をルーブリックで提示して進めてきた。しかし、取り組みを終えて、スピーチに取り組む際に使う評価として適切だと思う評価基準を生徒に尋ねてみると、次のような回答が返ってきた。

- ・積極性
- ・プロジェクト全体でどれくらい頑張ったか
- ・スピーチでどんなことを言いたいのかが伝わった
- ・何度も英文を考え直したこと

その他の回答としては、設定された評価で妥当だとあった。プロジェクト全体を振り返って、プロジェクトに対する個人の達成度や満足度を見るために行ったアンケートによると、積極的にプロジェクトを行なったと感じている生徒が多いことが伺える。また、ルーブリックを使った自己評価は、つけたい力が明確で取り組みやすかったという声もある。今回の実践では、スピーチの内容と発表スキルを評価の対象として取り組んだため、すべての生徒がAとして判定することは難しかったようで、半数以上の生徒はBという評価を出していた。ステージ上でジェスチャーをすることができなかったからというのがその主な理由である。

《総合目標》

	A	B	B-	C
自分の考えを相手に伝えるに必要な手段や方法を考えたスピーチにする(表現力)	自分の意見が相手に分かってもらえるような文章構成を考えた英文を書くことができている、自己アピールや自分の主張を相手に伝えようとした表現やジェスチャー、アイコンタクトがある。	自分の意見が相手に分かってもらえるような文章構成を考えた英文を書くことができている、自己アピールや自分の主張を相手に伝えようとした表現はあるが、ジェスチャーやアイコンタクトなどの行動がない。	自分の意見が相手に分かってもらえるような文章構成を考えた英文を書くことはできているが、自己アピールや自分の主張を相手に伝えようとした表現が少なく、ジェスチャーなどの工夫がない。	自分の意見が相手に分かってもらえるような文章構成を考えた英文を書くことがあまりできておらず、自己アピールや自分の主張を相手に伝えようとする努力や工夫が凝らされていない。

(3) 中学校第2学年の事例③

○単元名「Show and Tellをしよう」

自分の持ち物と、それにまつわるエピソードを英文で紹介するという活動である。この授業において、学習した英語表現をもとに自分のいいたいことを相手に伝える場面を設定する。自分たちの紹介したいものを選び、動作や表情を工夫し、表現する。聞くほうも、わからない表現でも推測しながら、相手の言いたいことを推測しながら、相手を理解しようという態度を身につけていく。また、お互いで評価することによって、相手のよい部分を自分の中に取り入れよりよい表現力を育てる。

○単元計画

- 1 時間目 ・ Show and Tell についての説明と、提示物の決定
Show and Tell の概要の説明や、活動時間などを伝え、見通しを持たせる。
- 2 時間目 ・ 英文作りについての説明
英文作りについて、主語＋動詞の順で書くこと、メモは箇条書きをするなどの英文作りの準備についての注意事項を説明した。そして、紹介する対象物についてのエピソードや、伝えたいことを日本語で箇条書きさせる。英文の語順や表現に注意して英文作りを始める
- 3 時間目 ・ 英文原稿作り（続き）
- 4 時間目 ・ 小グループでの発表と英文原稿の修正
3～4人でグループになり、自分の英文原稿を読んでみる。その後聞き手からの感想、英文のわかりやすさなどを意見交換し、自分の原稿を修正する。
- 5～6時間目 ・ 発表
(2時間) 順番に発表していき、聞き手は一人ずつ評価していく。指導者が一つだけ内容についての英文で質問をし、英語の文で答える（書く）という英問英答も設ける

○授業の実際

【原稿の書き方】

Show and Tell をするにあたり、まとまった長さの英文を次のような手順で書くように指導した。

①イントロダクション（出だし）

まず、聞き手の注意を引くために、モノを提示し、名前やいつ手に入れたのかを言う。

②ボディ（本論）

いつどこで、なぜ手に入れたのかなど説明や、まつわるエピソードを入れ込む。

③コンクルージョン（結び）

これからのことや、みんなへの投げかけなどし、印象深くしめくくる。

【見せ方】

Show and Tell で見せるものは、みんなにわかりやすいように持ち上げて見せる。ビデオやカセットデッキなどを使用して紹介してもよい。

日本語での考えや組み立ては箇条書きにすることにした。日本語を最初に考えるとどうしても日本語から抜け出せずに日本語の表現しか使用できなくなるのを極力避けるためである。

話すときのポイントは、「声の大きさ」「原稿を読まずに上を向いているか」「提示はわかりやすいか」「アイコンタクトはとれているか」「わかりやすい英語であるか」

聞く態度では、「にやにやすするなど不快に思うことはしない」「うなずきなどをいれる」など、マナーの面での注意事項を示した。

○評価について

それぞれの Show and Tell を聞くときに、相互評価も取り入れることにした。以下の観点で評価していった。

発表者 ()	
	評価 ○をしてください
声の大きさ	よく聞こえる ぶつうに聞こえる 聞こえづらい
show の工夫	上手に見せている ぶつうに見せている 見えない
tell の努力	覚えている 何回も見ている 覚えていない
わかりやすさ	ほとんどわかる だいたいわかる わからない
Comment	

ひとりずつ、順番に前に出て発表し、終われば聞き手は評価シートに相手に対する評価を書き込む。コメント欄には、気づいたこと、率直な意見など書くようにした。そして、評価を書き終わることを見計らって、先ほどの発表内容に関する質問を指導者が英語で質問

し、他のシートへ答えを書くという活動も平行して行った。

英問の例 () 内は、解答例

What's her pet's name?

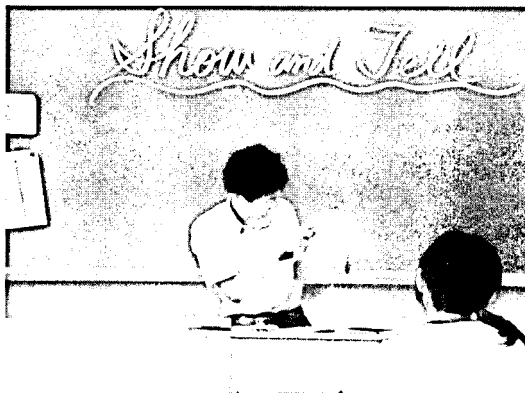
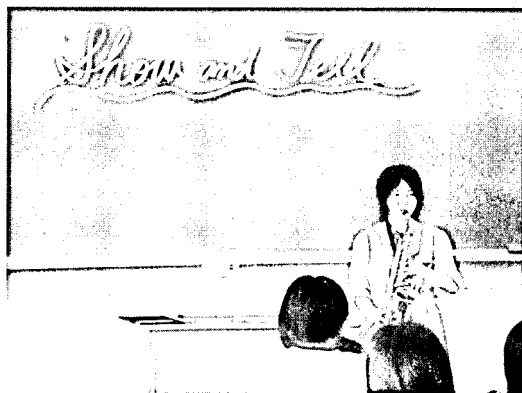
(It's Kamekichi.)

When did she get her saxophone?

(She got it last year.)

How old is his basketball?

(It is two years old.)



(聞き手のコメントより)

- Do you like~?と聞いたとき、もうちょっと間を空けるとよかった。だけど、問いかけるのはいい方法だと思う。
- よく聞こえていたし、覚えていたのでいいと思う。けど、もう少し長くシューズを見せたらいいと思う。
- 視線をもう少し上にしたほうがいいかなあ。
- 内容が難しく少しわからなかったけど、発音がよかった。
- クラリネット上手だったよ。ゆっくり話していて聞き取りやすかった。

○評価の整理

発表が終わったあと、それぞれの評価シートを発表者へ渡し、自分の発表に対して聞き手がどのように評価しているかを集計、整理させた。そして、自己評価へとつなげていった。

What do you think of this activity?

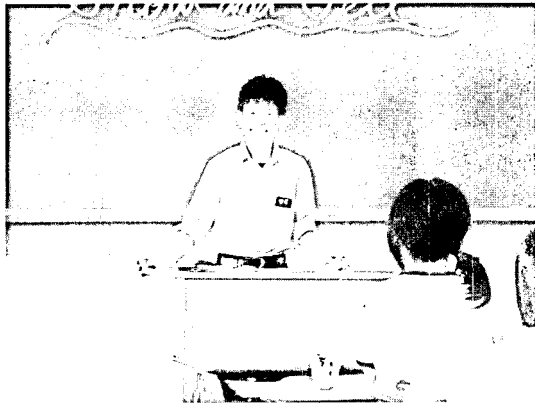
練習では…	<ul style="list-style-type: none"> • 精一杯取り組めた • もう少しやっつけばよかった • 練習不足だった
本番では…	<ul style="list-style-type: none"> • 満足できた • 少し悔やむところがあるが、まあできた • 練習を發揮できなかった。 • 全然だめ…
Show and Tell は実際にやってみてどうでしたか？	
ほかの人の Show and Tell を聞いて、勉強になった部分はありましたか？	

○生徒たちの感想

(実際にやってみて)

- 練習では全部覚えてすらすら言えたのに、スピーチの時はめちゃくちゃ緊張していて、思うようにできなかった。
- 思うように言葉は出なかったけど、結構おもしろかった。
- 発表はめっちゃ緊張した。発表までの過程が楽しかった。
- 一言目を言うまでとても緊張しました。何とか発表できたのでよかったです。

- ・難しい。覚えにくい。いかに簡単な語で表現することが難しいかがよくわかった。(他の人の発表をみて、勉強になったこと)
- ・簡単な英文がわかりやすくていい。
- ・Yさんはみんなの知っている曲にしていたので、そういう気遣いをするといいと思う。
- ・わたしは絵を使ったのだけど、写真で見せている人もいて、勉強になった。
- ・CDとかDVDを使って発表している人もいてよかった。



○授業全体を通して

いかに聞き手のことを考えて、「伝える力」をつけるかと言うことに関しては、まず自分の読む英文の推敲をさせた。自分が言いたいことを辞書で調べても、難しい語ばかりだと相手に理解されない。自分たちの知っている内容や、学習してきた表現をなるべく使って英文作りを進めることに多くの時間を使った。「こういう表現に言い換えられる」という発想の切り替えがなかなかできず、どうやって英文を作ってよいかわからない生徒がほとんどであったが、ヒントを与えながら、考えさせるようにし向けると、少しずつ自分たちで作れるようになっていった。相手を意識させながら英文を作るという活動は初めてだったためか、思ったよりも時間がかかってしまった。

本番前には、一度少人数の前で自分の発表を見せ、意見をもらう中で、自分では気づかなかった所を修正させた。本番後の感想は、ほぼ全員が「緊張した」と感想を書いていたが、結構楽しかった、よかったという活動に対しての肯定的意見を持っていた。もっと練習しておけばよかった、もう一度あればもっといいものができるのに、という意欲ある声もみられた。最初は大勢の前で「話す」ことには苦手意識から抵抗感を持つ者もいたが、やりきった後はある程度の達成感も

感じられたのではなからうか。

聞く活動も同時に行ったが、自分も実際に発表するというので、話し手の立場もよくわかるということもあり、真剣に聞いていた。聞く姿勢もよかったので、いい雰囲気の中で発表ができた。聞いた後の評価もよくできており、相手の改善点も書いているものが多かった。あとで全員からの自分への評価を見て振り返る時間を与えたが、自分への指摘も、それが的を射ているので、素直に受け入れた形の反省ができていた。

必修教科の英語では、一人ひとりがじっくりあるまじった英文を作り、それを一人ひとりが発表するという、「話す」活動があまりなく、生徒も他者前で「話すこと」に慣れていない。自分が書いたものを話すことにつなげ、他者からの反応をもとに、自分の表現について振り返るという活動を取り入れたい。

4. 成果と課題

今回の実践は、本学園が提言する21世紀型教科学力である「協同的創造力」を育むことをねらいとして行なった。少人数によるプロジェクト型学習を主とした実践に対する評価は、生徒の感想や、アンケートによる自己評価からも伺えるように、ある一定の満足感や達成感を持った生徒が多く、活動内容に対して肯定的であることから、協同的にプロジェクトを組んで学習を進めることによって、新たな力を生み出していけると考えてよい。しかし、評価方法の妥当性や信頼性については、今後さらに検討していく余地がある。プロジェクト型で学習を進める限り、生徒間の相互評価はもちろんのこと、自己評価を積み重ねることで、生徒個人の変容を的確に評価していく評価方法の確立が必要である。本研究は、1年目の実施であるが、今後も多くの授業実践を積み重ね、評価方法を検証していく必要がある。今後さらに継続して進めしていきたい。

参考文献

- 1) 松浦伸和、朝倉匡夫、松尾砂織「中学校英語科における評価規準と評価方法の開発」、『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第34号、2005、pp. 437-444.
- 2) 広島大学附属三原学園編著「21世紀型“読み・書き・算”カリキュラムの開発」、2005
- 3) 太田美智彦、長江宏共著「中学校英語科絶対評価の処方箋」、2003
- 4) 柳井智彦、「中3英語の絶対評価—テスト例と苦手な子への指導ポイント」2003